
すばらしき日本憲法

ヨネ@ハイテンション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すばらしい日本憲法

【Nコード】

N1717E

【作者名】

ヨネ@ハイテンション

【あらすじ】

少しだけ未来。その未来の日本に新しい政治が生まれた。それはバイオコンピュータにより状況にあわせ日々変化する憲法だった。それによって日本はすばらしい国へと生まれ変わるのだが・・・

今より少し未来。

そんな少し未来にも日本って国は何とか存在していた。

まあ経済はダメダメになるわ。

政治家は汚職しまくりだわ。

もう、しっちゃんかめっちゃんかだったんだけど、そんな時に一人の天才科学者がこう言いやがった。

「政治家なんて要りません。要は政治家よりも政治能力があり、さらに悪事に加担しない清廉潔白な思考が存在すればいいのです」

その翌年、自称高潔な日本人様たちの賛成多数により新しい政治家が誕生した。

いや、起動したと言うのが正しいんだろうな。

世界初のバイオコンピュータによる政治が施行された。

コンピュータ様は日本って国がよくなるようにとんでもない速さで演算して憲法を作り直した。

しかもだ、その憲法は毎日変化しやがる。

世界の情勢、日本の状態、それらに瞬時に対応するのだ。

そりゃそんなポンポン憲法変えられたら、まともに生活なんかできやしないと思うのが普通だろ？

しかしだ、これが見事に的中しやがった。

おかげで今日日本って国は世界で一番すばらしい国って事になったまっっている。

まあそんな大層すばらしい国に住んでいる俺は、金が無くなった時にだけバイトしてあとは遊んで暮らしてるダメ人間なんだけども、しかも実家にパラサイトときたもんだ。

あ、こんな俺だけの一応彼女くらいは居るんだぜ。

『ねえ、私のマンションで同棲しようよー』

なあんて甘い言葉を囁かれてはいるものの、実際あまり気乗りし

ない。

だってよお、やっぱ実家って楽ちんじゃん。

飯は出来てるし、風呂は沸いてるし、洗濯してもらえるし。それでいて日本は平和ですばらしい国ときやがる。

俺は何不自由なくお気楽極楽に暮らしていた。

暮らしていたはずだった。

チュンチュンと小鳥のさえずる声に導かれるように、俺は目を覚ました。

おつ、珍しくちゃんと朝早く起きたもんだ。

普段は太陽が真上にくるくらいまで寝てしまってるもんだからなよおし、そんじゃ朝飯にありつこうと、俺は階段を下りて台所に向かう。

「おはよお」

ふぬけた声で台所に居た親父とお袋に挨拶をする。

「お、お、お、おはよう。高幸^{たかゆき}」

「高幸、は、は、はいのね！ めずらしいわよね！ おほほほはて？」

親父もお袋もなぜか異様に挙動不審だ。

俺が真正面に立つても何故だか目を合わせようとしない。

まあ両親が変だとしても俺には関係の無いことだな。そう思いながらテーブルの上に置いてあったトーストに口を付ける。

「あ、あ、あのなあ。高幸は朝の日本憲法ニュースは見たかな？」

さっきまで目を合わそうとしなかったはずの親父が俺の目の前にわざわざやってくる。

「日本憲法ニュース？ なんだよそれ、そんなん見るわけねえじゃん」

「そ、そうかあ。そうだよなあ、高幸はニュースなんてみないもんなあ。ハ、ハハハハ」

卑屈に笑う親父の声が妙に癪に障った。

「うつせえな。ニュース見なくても死んだりする訳じゃねえだろうがよ」

俺はパンをくわえたまま台所を出ようとして親父に腕を捕まれた。「高幸い、ちよつとまってくれないかなあ」

引き離そうとする俺を押しとどめるように親父の腕に力が入る。

「高幸、朝の日本憲法ニュースにはな。毎朝憲法が発表されるんだよ。それでだな、20歳で長男それでいて無職の高幸と言う名前の男は左目を潰さない駄目な事に決まったんだよ」

はあ？

親父の言っている意味がわからなかった。

それは新手のジョークかなんかなのか？

「わかっていると思うが、日本憲法は絶対なんだよ。実際この憲法のおかげでわれらの日本は素晴らしい国へと生まれ変わったんだからね。という訳だから、本当は自分の息子にそんな事をしたくは無いのだけれど、憲法なのだから仕方が無いんだよ」

親父の顔は全く笑っていない、むしろとてもなく真面目だ。

「ちょ、待てよ！なあお袋、親父になんか言ってやってくれよ！」

俺はすかさず台所で洗い物をしているお袋に助けを求めた。

「高幸、私たち日本人は日本の憲法を守らなくちゃいけないの。それが私たちが日本人である証なのよ。さあ少し痛いかもしれないけれど我慢するのよ」

そう言うお袋の手にはアイスピックが握られていた。

「おい、おいおいおいおいおい。お前らなに言ってるのかわかってんのかよ！」

俺はあとずさるうとして、足を滑らせもんどりうって倒れこんだ。

「お母さん痛くない様に頑張るからね」

いきなり俺の左目の視界に鋭利に尖った銀色の物体が入る。

それは少しずつ、少しずつ近づいてくる。

なぜだろう、俺の身体はまるで金縛りにあったように動けないでいる。

逃げなきゃ、逃げなきゃいけないってのに、何で動かないんだよ俺の身体は！

「動いて別の場所を怪我させるとまずいからお父さんがしっかり支えていてあげるからね」

お前か！ お前のせいで動かないのかよ俺の身体は！

いや、それだけなはずは無い、親父の力より俺の方がずっと強いはずなんだ。

俺の身体は恐怖に支配されちまっている。

朝から行われるこの非現実的な光景。

ありえない、ありえるはずがない。

そんな事を思っている間にも、銀色の先端部分は俺の眼球のまさに目の前まできている。

こんなのが現実なはずが無い、これは夢だ、きつと夢だ。

「うわああああああああああああああああああああ」

俺は叫び声をあげながら目を覚ました。

全身が汗でびっしょりと濡れている。

ははは、そりゃそうか、あんな悪夢を見ればしょうがないよな。ベッドから身体を起こそうとして激痛が走る。

そう、左目から……………

俺は右目を閉じてみる。

見えない、何も見えない。

なんでだよ、どうしてだよ、なんで見えないんだよ、おかしいだろ、まじおかしいだろ。

俺の左目はもう見えやしない。

ベッドから跳ね起きると、俺は部屋の隅にある鏡のところに向か

う。

そこには哀れな片目の男が立っていた。
そうそれは俺だ。

両手で左目を恐る恐る触ってみる。

近づいてくるはずの手が全く見えない。

プックリと膨らんでいるべき眼球が、無い……

つぶれているんだ、俺の左目の眼球はつぶれているんだ。

「あ、あはははは、あははははは。なんだよ、どうしたっていうんだよ」

涙腺すらつぶれてしまったのだろうか、俺は右目だけで泣いた。

階段を下り、俺は両親の元へ向かう。

「てめえら、よくもやりやがったな！」

叫んだ言葉は誰にも届かなかった。

なぜならば死体は聴力を持ち合わせていないからだ。

台所には二つの死体があった。

それは多分、少し前までは両親と呼ばれていたものだ。

「なん、なんなんだよ。なんでなんだよ……」

テーブルの上には薬の瓶と手紙が置いてあった。

どうやらこの薬を飲んで死んだらしい。

おかしいな、なんでだろ、両親が死んだっていうのに俺の心は何故だかそれほど乱れてはいない。

あれか、さっき俺の目を潰したのがこいつらだから？ そのせいなのか？

それとも俺には元から家族愛なんてものがなかったのか？

とにかく、俺は手紙を読んでみる事にした。

『高幸、目は大丈夫かい？ 今日朝の朝の日本憲法ニュースではね、20歳で長男それでいて無職の高幸と言う名前の男は左目を潰したあと、その両親は死ななければいけないって言っていたんだよ。だ

から父さんと母さんは自殺しました。これから後大変かもしれないけれど、われらが日本は素晴らしい国だからきっと大丈夫です。高幸もすっかり憲法を守るんだよ」

俺は読み終えた手紙をゴミ箱に投げ捨てた。

吐き気がする。

よく考えてみる、俺以外にも同じ条件の奴は絶対居るはずだ。そこでも同じことが起きてるって言うのか？

そこでも高幸って名前の男は片目で両親の死体を眺めてるってわけなのか？

どういう事なんだよ。

そうすることで、一体この日本のなにが良くなるって言うんだよ。俺の目がつぶれると日本の経済が豊かになるとでも言いやがるのかよ！

俺は辺りのものを手につかンでは投げつけた、投げつけた。

疲れ果てて地べたにへたり込むまでそれは繰り返された。

「はぁ。俺・・・・・・・・どうしよう」

そう言うてはいるが、どうするかは決まっていた。

俺の彼女、朋子ともこの部屋に転がり込みうと決めていた。

幸いと言って良いのかわから無いが、彼女は俺との同棲を望んでいた訳だし、事情も話せば快く承諾してくれるに違いないだろう。

俺はでかい旅行鞆に適当に服やら日用品やらを詰め込んだ。

とにかく、速くこの家を出て行きたかった。

両親の死体が転がっているこの家を・・・・・・・・

「大丈夫！ 痛くない？」

朋子は優しく俺を迎えてくれた。

俺は玄関のドアを開けた瞬間彼女を抱きしめていた。

「愛してる！ 俺お前のことすっげえ愛してる！」

朋子は最初驚いていたようだったが、素直に俺の抱擁を受け入れ

てくれた。

そして俺たちは深く唇を重ねた。

「ちょっとシャワー借りるな」

俺は朋子に声をかけると服を脱ぎ散らかしユニットバスに飛び込んだ。

「まあ、だらしないんだからあ」

そう言いながら朋子は俺の服を拾ってたたんでくれた。

朋子の部屋に来てやっと少し一呼吸つけた。

熱いシャワーが俺の思考を段々正常に戻してくれる。

結局朋子には事情を話さないでおいた。

説明がめんどくさいってのもあったが、変にショックを与えたくなかったからだ。

まあ彼氏の片目がつぶれてるってだけでかなりショックなはずなんだしな。

あれ、そう言えばあいつそれほど俺が片目になってるって事に驚いてなかったな。

確かに目を心配してくれはしたが、驚いた表情は無かった。

どう言う事だろう？

まあそんなことは深く考えないようにしておこう。

これから先考えなければならぬ事は他にもっとあるのだから。

俺はシャワーから出ると朋子はテレビを見ていた。

「おっ、なんか面白い番組でもやってるのか？」

「高幸くん何言ってるのよお。この時間は夜の日本憲法ニュースに決まってるじゃない」

えっ？ 夜の日本憲法ニュース？

「これを見るのは国民の義務なのにい。高幸くんたら悪い子なんだからっ」

「いや、あれだ、俺テレビほとんど見ないからさ」

「あのねあのね、今日の夜の日本憲法ニュースだね。愛し合ってい

る今日同棲を始めたカップルの男子は彼女に心臓を一突きされて死ぬことって決まったんだよお」

いつもと同じ表情。俺とデートしてるときと同じ表情。

そんな表情で朋子はとんでもない事のはずの台詞をさらりと言つてのけた。

「と言う訳だからあ。ねっ」

何が、何が『ねっ』なんだよ。意味わかんねえよ。

「じゃーん。包丁でーっす」

でーっすじゃないだろ。どう考えてもおかしいだろ。

「高幸くん、私頑張つて心臓を狙うね！ちゃんと憲法守つて見せるね」

ニツコリと笑みを浮かべながら、朋子は俺の心臓めがけて包丁を突き刺そうとする。

俺は勿論避ける、避けるに決まっている。

「高幸くん、どうして避けるの？ 憲法に違反したら死刑になっちゃうんだよ？」

「違反しなくても死ぬだろうが！」

憲法に従つて死ぬが、憲法に逆らつて死ぬか。

二つの選択肢があるって言うのに結果は両方同じときている。

これじゃ、選択肢の意味が無いじゃねえかよ！

考えろ、考えるんだ。

朝の時みたいは何も考えないで恐怖に負けるんじゃない。

「愛してるよ、高幸くん。さあ私に心臓を突き刺させて！」

そんな間違つた愛があるかよ。

愛………待てよ、そうかそうだよ！

あつた。第三の選択肢が！

「ちよつと待て朋子！」

「なによお高幸くん。あんまり時間ないんだからねっ」

「あの憲法は『愛し合っている今日同棲を始めたカップル』が対象だったよな？」

「そうだけど、それがどうかしたの？」

「なら、その憲法は無効だ！　なぜなら俺はお前をこれっぽっちも愛してなんかいないからだ！」

「えっ、高幸くん。そんな嘘ついててもだめだよ。私たち愛し合ってるじゃないの」

朋子は包丁をぶらつかせながら笑った。

「嘘なんかじゃない。今日だって行く場所がなかったから仕方なくここに來ただけだし。あとはお前の身体が目当てだっただけなんだよ。適当にSEXして気持ちよければそれでいいんだよ。てか、おまえうぜえんだよ。ほんと、うざい、うざい死ねよまじで！」

「そ、そんなあ高幸くん、うそだよ。嘘だって言つてよ……」

「嘘じゃねえよ！　まじで死ね！」

朋子はしゃくりあげるように泣き出すと大粒の涙をボロボロ床にこぼした。

「そういう訳だから、憲法は無効だよな。じゃ俺はここから出て行くから」

そうさ。これなら俺は死ななくてすむ。

それに朋子を殺人者にしないで済むんだ。

心にも無いひどい言葉を朋子にぶつけるのは辛かったけど、こうするのがお互いのために一番いいんだ。

俺は荷物をまとめると部屋を出て行こうとした。

「待つて、待つてよ高幸くん。私の事愛してるって言ってくれたよね？」

「ま、まだ言つてやがるのかよ、あ、あれは嘘だって言っただろうが！」

「そうなんだ、嘘なんだ。私すっかり騙されてたんだ。あははははははは」

乾いた笑いが部屋中にこだまする。

「高幸なんか、死んでしまえええ！」

俺の胸が熱い。

なんだろ、これ。

なんだよ、これ。

熱いよ、痛いよ。

朋子の手には包丁が無くなっていた。

そのかわりに俺の胸に深々と包丁が刺さっている。

俺の選んだ三つ目の選択肢。

それも結果は同じだったということだ。

バイオコンピューターは今日も憲法を作り続ける。

『血液型がB型の人は全員死になさい』

日本の人口は4分の1になった。

日本は前よりもすばらしい国になった。

コンピューターは悪事を働くことなど無く、ただ日本が良くなる
ためだけに憲法を作り続けた。

日本人はみんな幸せだったとさ。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1717e/>

すばらしき日本憲法

2010年10月8日15時21分発行